

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：32670

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12476

研究課題名(和文)日本の女性警察官に関する通史的研究

研究課題名(英文)Historical Research on Japanese Female Police Officers

研究代表者

池川 玲子 (IKEGAWA, Reiko)

日本女子大学・家政学部・研究員

研究者番号：50751012

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本における女性警察官の起源とは？女性警察官はどのように発展してきたのか？女性警察官はどのようなイメージをまとってきたのか？を問いの柱とした。

とを通じ女性警察官の生成発展の様相を通史的に明らかにした。また時代ごとに異なる警察の女性活用政策は、当該時期の社会的危機と密接に関連していたこと、しかし女性たちの任務は限定的で、危機を生じさせる社会構造の変革には及ばなかったことを具体的に検証した。

に関する調査では、行政広報や大衆文化を通じて「母性的な女性警察官」イメージが喧伝された結果、危機の本質が隠蔽され根本的な解決を阻害してきた可能性を指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、アジア太平洋戦争から現在に至るまでの長いスパンで、女性警察官に関する制度、広報におけるイメージ、個々人のライフヒストリーなどの多様な視点から、日本の女性警察官に関する通史的記述を目指したものである。

女性警察官は、社会の安全・秩序を維持するための行政機関の中で、一面、強固にジェンダー化されつつ、一面、ジェンダーを越境しながら女性の専門職として確立してきた。今や全警察官の一角を占める女性警察官が国民生活に与える影響は極めて大きい。しかし従来の女性警察官史には重大な欠落や誤謬があった。当研究によってようやく、今後の女性警察官に関する歴史学的研究の基礎が固まったといえる。

研究成果の概要(英文)： This research is intended to answer the following questions: (1) What are the origins of female police officers in Japan? (2) How have female police officers developed? What kind of image have female police officers been clad in?

Through (1) and (2), I have clarified the historical aspects of the emergence and development of women police officers. The study also specifically verified that police policies for the utilization of women, which varied from period to period, were closely related to the social crises of the relevant period, but that the duties of women were limited and did not lead to changes in the social structure that caused the crises.

The study on (3) pointed out the possibility that the image of the "motherly female police officer" propagated through administrative publicity and popular culture may have obscured the true nature of the crisis and prevented its fundamental resolution.

研究分野：日本近現代女性史

キーワード：ジェンダー 警察官 イメージ パトントワリング 交通戦争 母性 警察広報 戦災孤児

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究開始当初、「女性警察官」職は、複数のレベルにおける変化の時期にあった。一つは、男女共同参画政策の一環として推進された幹部登用である。キャリア官僚が県警本部長に就任するケースも現れ始めていた。二つ目は少子高齢化対策として推進された各都道府県警察における女性警察官の採用枠の拡大である。三つ目は性犯罪や DV 問題に関する社会的認識の変化や法律改定を背景とした、現場での女性警察官の職域拡大である。

(2) 地殻変動的に急激な活用が図られはじめた女性警察官という公務員職。その存在が今後、国民生活に与える影響は甚大なものになる。しかし従来の歴史分野において語られてきた女性警察官史には、重大な欠落や誤謬があった。過去に対する正しい認識と理解は、現在を批判的に確認し、未来を構想するために欠かせない。このような背景の下、「日本の女性警察官の歴史」を解明することが、喫緊の課題であると考えられた。

2. 研究の目的

(1) 女性警察官は、社会の安全・秩序を維持するための行政機関の中で、一面、強固にジェンダー化されつつ、一面、ジェンダーを越境しながら、女性の専門職として確立してきた。紆余曲折したその経緯を、事実の集積によって精緻化し通史的に描き出すことが、本研究の第一の目的であった。

(2) 女性警察官は、多くのフィクション作品で中心的なテーマとなってきた。そのイメージは極めて特異なものである。社会的弱者(子ども)の庇護者たる「母性的」存在として描かれる一方、武器使用を含む権力を使いこなす「男性的」存在であることが強調される。また全国の都道府県警察の広報戦略において、若い女性が、「エロティックな魅力」を振りまきながらミニスカート姿で踊るフラッグバトン隊は、ほぼ常設化されている(彼女たちは警察官である場合も、警察音楽隊として別枠で採用された臨時スタッフの場合もある)。そのような矛盾に満ちたイメージによって表象されてきたもの、そしてその裏で隠されてきたものを、女性警察官の紆余曲折した歴史を踏まえつつ、イメージ分析、ジェンダー分析等の越境的な分析手法によって探ることが本研究の第二の目的であった。

3. 研究の方法

研究開始時に立案した研究方法は以下のようなものであった。

(1) 全国の都道府県警察史に関する文献資料を通じ、女性警察官の採用、処遇、任務、退職後の実態等に関する基礎的なデータの収集と整理を行う。

(2) 全国の都道府県警察において、占領期に採用された女性パイオニアたちへのインタビューを実施する。

(3) 女性警察官のイメージとその変遷を明らかにするために以下の素材を収集分析する。

女性警察官をテーマとした映画、テレビドラマ、コミックなどのサブカルチャー

都道府県の警察広報資料

4. 研究成果

(1) 「日本の女性警察官の歴史」の解明

全国の都道府県警察史に関する文献資料を通じ、女性警察官の採用、処遇、任務、退職等に関する基礎的なデータの収集と整理を行なった。その結果、通史を描き出すための多くの事実が明らかとなった。以下はその一部である。

・戦前期における、「日本の女性警察官は占領期に GHQ によって導入された」という通説を覆す複数の事例の発見。

・占領終結後における、女性採用が全国的に中止となった経緯。

・1960 年代における、女性の再採用が開始された経緯と、地域の個別具体的な事情。特に、オリンピックや万国博覧会といった国家的イベントとの関連。

・1950 年代における売春防止法施行と女性警察官業務の変容。特に「基地の町」と呼ばれる地域の事例。

・1950～70 年代における、「交通戦争」下で、非常勤の女性交通指導員と、いわゆる「緑のおばさん」が担った役割。

・1960～80 年代における、都道府県警察の親睦会誌から見えてくる、女性警察官の退職後の生き方。特に「駐在さんの奥さん」として、女性警察官 OG たちが担った業務。

・1960-70 年代における、世界的な女性差別撤廃の動きが日本の警察活動に与えた影響。それを踏まえた上での、欧米モデルとの比較検討。

(2) 女性警察官のイメージの変遷

サブカルチャー

・1940年代から50年代の日本映画を通じた検討の結果、占領期には万能感にあふれた女性警察官像が喧伝されていたこと、そしてそのイメージが、戦時下で製作された女性動員映画と酷似していたことが明らかとなった。さらに占領終結前後には一転、無力な存在として描かれはじめることを確認した。

以上については、国内外の研究会で数度にわたり報告を実施した。

・サブカルチャー領域では、現在、二つの素材に取り組んでいる。一つは1970年の大ヒットテレビドラマ『ありがとう』（脚本：平岩弓枝）。もう一つが、令和の大ヒットコミック『ハコヅメ』（作：秦三子。元女性警察官という異例の経歴を持つ）。二作品の間にはジャンルの違いや、50年間という長い時間差が横たわっているが、ともに女性作家作品であること、ベテラン、中堅、新人という三世代の女性警察官たちが活躍するドラマであること、そして女性警察官の採用拡大が図られた時代背景の下で作られた作品ということでは共通している。今後、両作品の比較検討を本格化させていく。

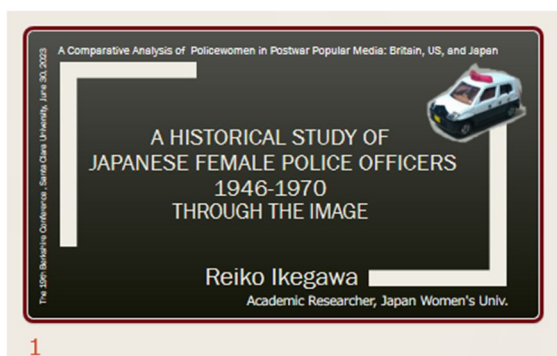
警察広報

・1950年代末から現代にいたるまでの、警察音楽隊のバントワラー隊、フラッグバトン隊の資料収集を行った。その結果、1950年代に警視庁音楽隊が在日米軍関係者からバントワリング技術を学び、さらに、警視庁の女性警察官トワラーを通じて全国の小中学校女子生徒たちに技術転移がなされたこと、各地の女子生徒トワラーたちの「健康なお色気」が、東京オリンピックや明治100年記念祭をきっかけとして流行した市区町村パレードを介して国民再統合へ結びついていったというダイナミックな流れを可視化した。これに関しては、2024年度に刊行予定の単著の一部をなすものとして論文化済みである。

・当初予定していたパイオニアたちへのインタビューは、COVID19パンデミックのために断念せざるを得なかった。このため、地域女性史関連の書籍や冊子、特に自治体がまとめた聞き書き記録を渉猟し、事例収集に努めた。現在、軍政下の沖縄のケース、戦災孤児が集結した熱海のケース、行政における児童保護施策に限界を感じ、警察退職後に自ら孤児保護施設を創設し、後には県議会議員として児童保護を推進した茨城県のケースなど、パイオニアたちのユニークな活動を発掘中である。

(1)(2)の成果によって浮かび上がってきたのは、国家的な危機が来るたびに、警察組織による大規模な女性登用策が実施されたこと、そして採用された女性スタッフたちが、社会的弱者対応要員として活用されてきたという事実である。例えば、占領期は戦災孤児の救済、高度経済成長期には「交通戦争」に直面した子どもたちへの交通ルール教育という名目で、多くの女性人材が投入された。と同時に、行政による広報や大衆文化を通じて、先進諸国では類を見ないほどに強力な、「母性的な警察官」イメージが喧伝された。しかし彼女たちの現実の任務は極めて狭い範囲に限定されており、弱者を生み出す社会構造を変革するには遠く至らなかった。女性動員は、むしろ根本的な解決を遅らせる結果になったと考えられる。そして「母性的な警察官」イメージの大量流通は、その危機の本質を隠蔽する役割を果たした。

以上の成果をコンパクトにまとめ、国際学会(パークシャー女性会議、2023年、於サンタクララ大学)にて報告を行った。以下はその際に用いた資料の一部である。



I Defeat of World War II

1945~1952

11

Anyway

U.S. influence was significant

Former New York city police commissioner

14

2. War orphans

- War damage
- Manchuria repatriation
- Abandonment

Total 123,511
(Insufficient statistics)
Excluding Okinawa

年別別 (数千人)	種別別
1945-1949	戦災孤児 28,268人
1950-1954	中国孤児 11,261人
1955-1959	朝鮮孤児 2,447人
	戦災孤児 81,266人
	保護者別
	保護が得られぬ孤児 107,108人
	養育に就けられた孤児 12,202人
	死亡した孤児を含む孤児 4,201人

16

In fiction

Maternal power of female police officer helps orphans get back on their feet

Picture story show

Film

17

Orphan -120,000
On street, in tunnel, at station

Thrift
Prostitution
Trafficking

Shelter Capacity 12,000

Small

Budget from the government

Internment

Escape

20

II Defeat of Traffic war

Late 1950s~ Early 1970s

27

②Promotion of female

- In 1959
 - "Green Aunt"
 - School childcare worker
 - War widows

35

- Uniform- Similar to regular police officer's
- Main duty- Coaching traffic manners

<https://www.mpa.go.jp/haijuro/449/4490700.html>

39



49

III Conclusion

- ① Defeat of Asia-Pacific war
 - ② Defeat of Traffic war
- National-scale misgovernment
 - The sacrifice of children
 - Female police staffs were used as crisis workers
 - The effect were limited

50

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 池川玲子
2. 発表標題 日本の女性警察官ジェンダー史的アプローチの試み
3. 学会等名 「総力戦下の「制服美女」と戦後のキャリア形成の表象とその継続性の分析及び国際比較」研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 池川玲子
2. 発表標題 「『大東亜』の女性映画人－鈴木紀子と坂根田鶴子－」
3. 学会等名 「日本における女性映画パイオニア：フェミニスト映画史の国際的研究基盤形成」研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 池川玲子
2. 発表標題 「未完の集大成「『平和』表象としての鳩と折鶴」考」
3. 学会等名 『ジェンダー×植民地主義 交差点としての「ヒロシマ」講座』（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Reiko IKEGAWA
2. 発表標題 A Historical Study of Japanese female Police Officers 1946-1970 through the Image
3. 学会等名 The 19th Berkshire Conference
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 池川玲子
2. 発表標題 VOL.6 『母性ファシズム 母なる自然の誘惑』
3. 学会等名 いまこそ語ろう、フェミニズム・メディアの過去・現在・未来『ニュー・フェミニズム・レビュー』発刊35周年・WANミニコミ図書館収蔵記念ブックトーク
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 加納実紀代、池川玲子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 インパクト出版会	5. 総ページ数 326
3. 書名 越えられなかった海峡	

1. 著者名 高雄きくえ、池川玲子他	4. 発行年 2022年
2. 出版社 インパクト出版会	5. 総ページ数 429
3. 書名 『広島 爆心都市からあいだの都市へ 「ジェンダー×植民地主義 交差点としてのヒロシマ」連続講座 論考集』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>その他の執筆物として以下。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・池川玲子、「四季録」(『愛媛新聞』2022年4月～9月 連載エッセイ 全26回) ・池川玲子、「『鈴木紀子』というパズル 映画脚本から婦人運動へ」(『NFAJニューズレター 国立映画アーカイブ研究機関誌』第19号、2023年1月4日) ・池川玲子、「加納実紀代さんの「最新作」」(Women's Action Network、「女の本屋」https://wan.or.jp/article/show/10697)

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------